



## 対人認知

### 政治行動論-8

・池田謙一・村田光二 1991.『こころと社会』東京大学出版会.  
 ・加藤義明編 1987.『社会心理学』有斐閣.  
 ・Schneider, Hastorf and Ellsworth 1978. *Person Perception*,  
 2nd ed. Addison-Wesley.



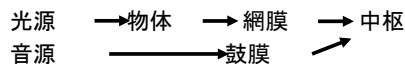
## 人や物に対する認知

- ・そもそも、人は常に(起きている間はずっと)人や物について認知している。
- ・認知とは、「知ること(cognition)」
- ・たとえば、教室に入ってきたとき
  - 西澤が前にいる(休講ではなさそう)
  - 今日の服装は
  - 教室の様子はいつもと一緒?
  - 机・イスがある
  - 他の人たちはどこに座っているか
  - 自分はどこに座るか
- ・これらのこころの営みは、「知ること」が前提



## 外界を認知するときのメカニズム

- ・物理的には



- ・ところが、すべての刺激が中枢に運ばれるわけではない
- ・また、あることを「知る」のに、すべての情報が必要なわけではない



## 認知の3特徴

- ・構造的
- ・安定的
- ・「意味」もっている

これらの特徴について順に検討

SH&E1979, 15



## 認知の特徴-1

- ・構造的に行われる
  - 構造を持っている
  - 構造を手がかりにする
  - ランダムではない
- ・Leeper (1935)の例
  - 少女を見せられてから、「どっちつかず」を見る場合と
  - 老婆を見せられてから、「どっちつかず」を見る場合で、見え方が変わる
  - 構造的な理解をしているし、また、それには、直前の経験が影響することを示している。



## 認知の特徴-2

- ・安定性をもっている
- ・Leeper (1935)の例
  - 少女をいったん見せられると、そこから「抜け出す」のが難しい
- ・教室内を前後するTAの例
  - 物理的には(網膜の上では)彼の身長は
    - ・近づくとき大きくなるし
    - ・離れるとき小さくなる
  - 身長が変化していると考える人はいない

SH&E1979, 5



### 認知の特徴-3

- 「意味」をもっている
- 構造的・安定的である → 「意味」もっている
  - あるいは、そこに存在する理由がある
- 教室を見渡すとき・・・
  - 西澤が前にいる → 授業をするため
  - 机・イスがある → 私たちがそれを使うため
  - 前方に大きなスクリーンがある → スライドを表示するため
- 「違和感」がない → 意味(理由)を理解できる

SH&E1979, 6



### 対人認知の場合—対物との違い

- 人は理由(意図 - intention)があつて行動する
  - モノが動くのは、外からの力による
- 自分の場合に置き換えて、その意図を推測する傾向がある
  - モノに対しては、そのようには理解しない
- (人の)行為は、インターアクティブ
  - 他人の行為は、自分の行為に対する反応である
  - また、自分の行為も他者の行為に影響を及ぼす
- モノには、通常、そのようには反応しない

・私の上で本を押しこめる  
・鉛筆を落としてみる

SH&E1979, 8



### 対人認知の3特徴 + $\alpha$

対物の場合と同じで、やはり

- 構造的
  - 安定的
  - 「意味」もっている
- ただし、対人の場合、さらに
- その行為の理由を考えようとする
  - 感情について(好んでしているか、不本意なのかetc...)判断しようとする
  - その人の性格を探ろうとする
  - 将来の行動の予測をしようとする

SH&E1979, 15



### 対人認知のプロセス

- 気付き (attention)
  - ・ 外見・状況・行為に注目
- 瞬間的な判断 (snap judgment)
  - ・ 持ち合わせるカテゴリーへの瞬間的な当てはめ
- 理由の推定 (attribution)
  - ・ 行為の理由を考える
  - 自発的な行為か、外的要因による行為かも判定
- 「性格」としてラベル付け
  - ・ 「暖かそう」、「信頼できる」、「要注意」 etc.
- 将来の行動の予測
  - ・ 同じような状況におかれたときに、どのように行動するかを予測

SH&E1979, 16



### 原因帰属 (attribution)

- 事例1
  - 教室の前で人が声を出している
  - その人は、20才くらいで、ジーンズにT-シャツ姿
  - 50才前後の人に対して話している
  - 荒々しい口調

「政治行動論を履修している学生が先週のエッセイの評価について抗議をしている」のではないかと想像をする。

- その場合に、君たちはいろいろな既存の情報(経験)にもとづいて判断している
- ある人が、なぜ、そのようなこと(行為)をしているのか推論する
- このプロセスを「原因帰属」と言う



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

- 共変モデルの3要素
  - 行為の主体は誰か
  - 行為の対象となるモノ(object)は何か
  - そのモノがどのような状況におかれているか

#### ■たとえば

- 犬好きな人(Aさん)がある
  - (たいていの場合)犬を見ると、あやす
- でも、どの犬でもあやすとはかぎらない(状況1)
  - ブルドッグだけはどうも好きになれない
- あるいは、いつでも犬をあやすわけではない(状況2)
  - ドロで汚れているときは、ちゅうちよする



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

#### ■原因帰属プロセスに必要な3つの情報

1. 時間的安定性 (consistency)
  - ・ 行為の対象が同じであれば、いつも同じ行動をとるかどうかが
  - ・ 朝・昼・晩、いつの飲むのでも、飲むなら紅茶ではなくコーヒー
2. 対象の違い (distinctiveness)
  - ・ ある対象に対して、細かな違いにこだわらずに一定の反応を示すかどうか
  - ・ 犬なら、どんな犬でも好きなのか、柴犬だけが好きなのか
3. 他者の一致度 (consensus)
  - ・ その対象に対して、一般の人はどのような反応をするか
  - ・ たいていの人は「犬好き」か、「犬好き」は珍しいか



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

#### ■原因帰属プロセスの3つの基本パターン

consistency	H	L	L	H
distinctiveness	L	H	H	H
consensus	L	H	L	L
原因帰属 (何・誰が原因か)	主体	対象	状況	主体と対象 の特殊な関係

#### ■ケース1

- ・ Aさん、誰とでも話すのが上手
- ・ Xさんとも、同じように楽しそうに話している
- ・ じつは、気むずかしいXさんと話す人は少ない  
→ Aさんの人柄 (主体) に原因がある



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

#### ■原因帰属プロセスの3つの基本パターン

consistency	H	L	L	H
distinctiveness	L	H	H	H
consensus	L	H	L	L
原因帰属 (何・誰が原因か)	主体	対象	状況	主体と対象 の特殊な関係

#### ■ケース2

- ・ Aさん、誰とでも話すわけではない
- ・ Xさんとは、楽しそうに話している
- ・ じつは、他のみんなもXさんとは楽しそうに話せる  
→ Xさんの人柄 (対象) に原因がある



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

#### ■原因帰属プロセスの3つの基本パターン

consistency	H	L	L	H
distinctiveness	L	H	H	H
consensus	L	H	L	L
原因帰属 (何・誰が原因か)	主体	対象	状況	主体と対象 の特殊な関係

#### ■ケース3

- ・ Aさん、(Xさんをふくめて) 誰とでも話すわけではない
- ・ Xさんとは、今日は楽しそうに話している
- ・ じつは、気むずかしいXさんと話す人は少ない  
→ たまたま話題が合った (状況) に原因がある



### Kelley(1967)の共変モデル (Covariation Model)

#### ■原因帰属プロセスの3つの基本パターン

consistency	H	L	L	H
distinctiveness	L	H	H	H
consensus	L	H	L	L
原因帰属 (何・誰が原因か)	主体	対象	状況	主体と対象 の特殊な関係

#### ■ケース4

- ・ Aさん、無口なのだけど、Xさんとはいつも話す
- ・ Xさんとは、今日は楽しそうに話している
- ・ じつは、気むずかしいXさんと話す人は少ない  
→ たまたま二人の相性があった (主体・対象) ことに原因がある